

連峯堂 彩り 初夏号
RENPOUDO'S COLLECTION SUMMER.

HP



Instagram



奥田連峯堂

TEL:075-561-3655

FAX:075-525-1148

営業時間：11時 - 18時

定休日：毎週水曜

〒605-0073 京都市東山区祇園町北側244

<https://www.renpoudo.com>

renpoudo@mth.biglobe.ne.jp

1.

色絵松文様透彫香炉

古伊万里

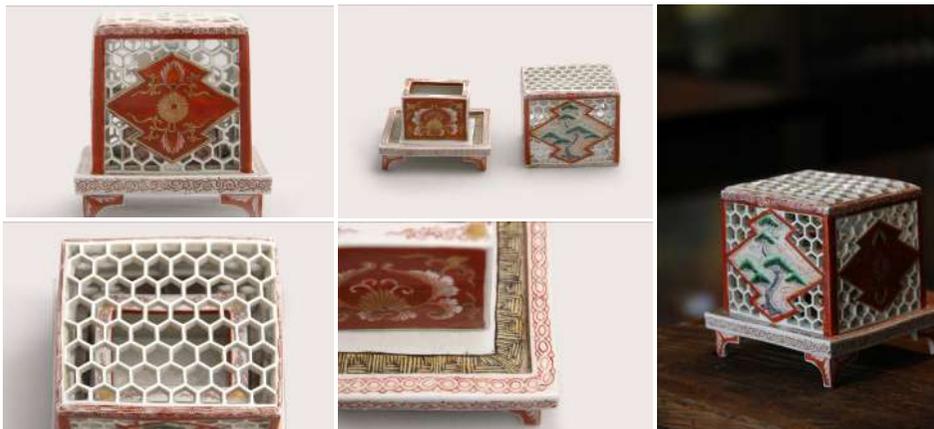
江戸時代（元禄期）

径11.5cm×10.7cm 高さ11cm

繊細な透かし彫りと鮮やかな色絵が特徴の古伊万里の香炉です。蓋には透彫文様が施され、側面には松の文様が色絵で丁寧に描かれています。

松は長寿と繁栄の象徴とされ、当時の美意識と吉祥の願いが込められています。

蓋を外すと、内側には火入れと台座が一体となった構造となっています。優れた職人技と洗練された意匠が融合した、極めて希少な逸品です。



2.

花扁壺

河井 寛次郎

共箱

昭和

口径7.5cm×7cm 胴径16cm×11.5cm 高さ22cm

民藝運動の旗手として知られる河井寛次郎による、扁壺です。

黄釉を基調とした地肌に、筒描きで花文様が描かれています。

胴部の両面に施された色絵の花文様は、それぞれ異なる趣があり、見る角度によって表情が変わるのも魅力のひとつです。



3.

流し葉食籠

河井 寛次郎

共箱
昭和
径15cm 高さ13cm

民藝運動の中核を担い、近代陶芸に独自の美を築いた河井寛次郎による、喰籠です。化粧土で装飾されたスリップウェアの蓋の甲部分には櫛目の文様が入っています。中に何か入れられても良いですし、そのまま飾って頂いても良い作品です。



4.

掛分紋打花瓶

濱田 庄司

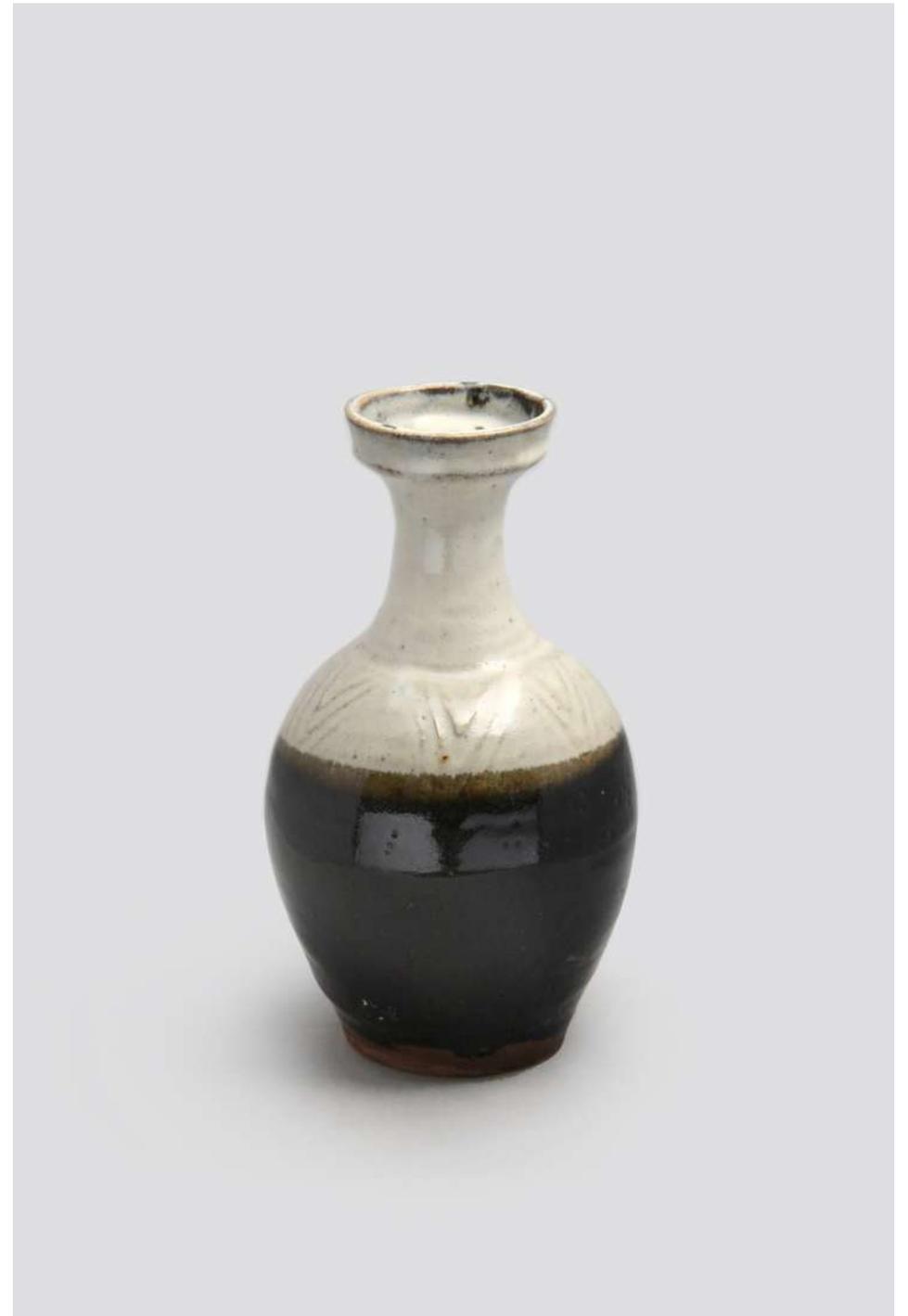
共箱

昭和

人間国宝

口径8.8cm 胴径15cm 高さ27.5cm

濱田庄司による花瓶作品。胴部には大胆な掛分の技法が用いられ、白釉と黒釉が美しいコントラストを見せています。上部には、濱田作品に見られる象徴的な紋打装飾が施され、素朴ながらも力強い民藝の美を体現しています。花を生けてもそのまま飾っても、空間に凛とした趣を添える一品です。



5.

白釉鉄絵取皿 5客組

濱田 庄司

共箱

昭和

人間国宝

径20cm 高さ5cm

人間国宝・濱田庄司による白釉鉄絵の取皿5客組です。
本作には、濱田庄司のトレードマークとも言える糖黍文様が力強い筆致で描かれています。
白釉のやわらかな肌合いと、鉄絵の濃淡が絶妙な対比を成し、料理を引き立てる器としても、観賞用としても優れた逸品です。
糖黍文様の描かれ方、高台や釉薬のかかり方にも一客一客に個性があり、魅力のひとつです。



6.

獅子絵大鉢

船木 研兒

共箱

昭和 - 平成

径42cm 高さ4.5cm

柳宗悦の民藝運動に共鳴し、イギリスのスリップウェア（化粧土を施した陶器）に大きな影響を受けながらも、独自の作風を確立した陶芸家、船木研兒による大鉢です。

堂々たるサイズของこの大鉢は、中央に力強く、そしてどこかユーモラスな表情をたたえた獅子の絵が描かれています。化粧土で描かれた獅子の線は、英国のスリップウェアを彷彿とさせるのびやかな筆致でありながら、顔つきや全体の雰囲気からは、日本の民藝的な美意識、特に大津絵などにも通じる素朴で親しみやすい魅力が感じられます。器の縁を飾る、びっしりと施された点描のような文様も、全体にリズムカルな生命感を与えています。



7.

象嵌赤絵繪変組皿 6客組

島岡 達三

共箱
昭和 - 平成
人間国宝
径21cm 高さ3.5cm

6枚とも文様の違う絵替わりになっています。島岡達三の特徴である縄文象嵌の技法が用いられています。

島岡達三は大正8年、東京都で組紐師の長男として生まれました。その後、濱田庄司に師事します。組紐師である父の組紐に着想を得て、組紐を器面に転がして跡を付け、そこに化粧土を埋め込む独自の縄文象嵌技法を編み出しました。その技法で人間国宝に認定されました。



8.

堆瓷象裂文大皿

松井 康成

共箱

昭和

人間国宝

径52.5cm 高さ6.5cm

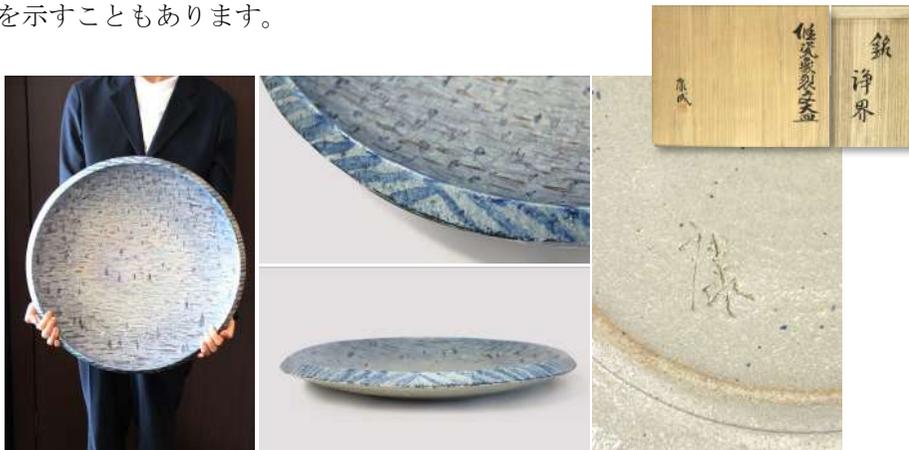
練上の技法により人間国宝になった松井康成（1927-2003）による大皿です。

練上とは、複数の異なる色の土を練り合わせ、その層の模様を活かして器を成形する高度な技法であり、松井康成はこの分野で卓越した技と芸術性を発揮しました。

約50cmという堂々たるスケールの大皿で、深い青色から薄い青色までグラデーションがかっている色は、眺める角度や光の加減によって表情を変えます。

松井康成自身により、「浄界」という銘が付けられています。浄界は、仏教用語で、清浄で正しい戒を守り、煩惱を断ち切った状態を指します。

また、世界全体が清浄で、煩惱の煩わしさが無い状態を示すこともあります。



9.

布目象嵌竹萩文箱

上田 哲三

共箱

径18cm×10.5cm 高さ9cm

京都の金工師・上田哲三による作品です。
外側には竹と萩の文様が繊細に象嵌され、金属ならではの重厚な美しさと品格が漂います。
天面や側面には金の縞模様が施され、和のリズムを感じさせる意匠となっています。
内側には布張りが施され、モダンな幾何学文様がアクセントとなっています。

上田哲三（1917（大正6）年生まれ）は、京都にて4代続く象嵌師の家系に生まれ、数々の展覧会で入選・受賞を重ねた名工です。
日本美術展（日展）や日本伝統工芸展などにおいても高い評価を受け、伝統技術と美意識を融合させた作品を数多く残しました。



10.

青磁椿文陶板

田村 耕一

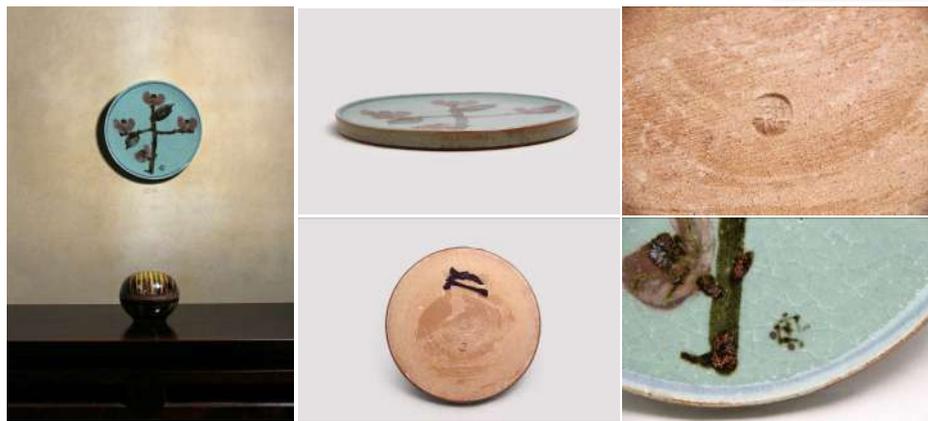
共箱

昭和

人間国宝

径27cm 高さ2cm

人間国宝・田村耕一による青磁椿文陶板です。
青磁釉の上に貫入が美しく入り、中央には、大胆に描かれた椿の花が描かれています。
裏面には「耕」印とともに、紐が取り付けられており、壁に掛けて飾ることができます。
田村耕一の卓越した造形美と装飾技法が結実した、美を伝える逸品です。



11.

ホタルブクロ陶匣

田村 耕一

共箱

昭和

人間国宝

径7.8cm×7cm 高さ5cm

「鉄絵」の技法で人間国宝であった田村耕一による作品です。掌に収まるほどの可愛らしいサイズの陶匣（とうばこ）は、小物入れや香合など、様々な用途でお使いいただけます。

白釉を施した素地に、ホタルブクロの花が力強く描かれています。ホタルブクロは、その名の通り、提灯のように揺れる姿が特徴的な野の花であり、田村耕一は自然への深い洞察と愛情を持って、その可憐な姿を独自の感性で昇華させました。



12.

ペルシア三彩花鳥文鉢

加藤 卓男

共箱

昭和 - 平成

人間国宝

径22.5cm 高さ6cm

加藤卓男は、ペルシア陶器を研究し、ラスタース彩の復元をはじめ、青釉、三彩、ペルシア色絵を復元しました。見込みには花と鳥が描かれており、三彩釉が中心に向かって流れている様子が見られます。



13.

バカラ 金縁足付鉢

径20cm 高さ8.5cm

戦前に作られたオールドバカラと呼ばれる古い手です。明治期にその当時の大阪の古美術商 春海商店の主人がフランス バカラ社に特別注文したものが最初です。暖かい季節に涼しげな御茶道具を求めのお茶人のために、鉢などの懐石食器や水指などを注文しました。色や形を設計図のようにして、注文していたそうです。



14.

祥瑞輪花向付 10客組

永楽 正全 (15代 永楽善五郎)

共箱
昭和
径11.5cm 高さ6cm

永楽正全による中国 祥瑞の写しです。側面には木にとまる鳥や笹、松が染付で描かれています。口縁は輪花状になっており、鉄釉が掛けられています。白地の見込みには、花文様が陽刻されています。

(見込み) 浮き彫りの文様がわかるように色を付けています。実物は白地です。➡



15.

伊万里 祥瑞写捻子文皿 10客組

径21cm 高さ3.5cm

伊万里焼の祥瑞写の捻子文皿10客組です。
中央の見込みには、龍が宝珠を抱える躍動感ある文様が描かれ、力強さと吉祥の意味が込められています。
見込みのまわりは、捻子状の区画に梅などの伝統的な吉祥文様が繊細な筆致で配されており、視覚的にも豊かな構成です。

染付の深みある青が白磁に映え、飾皿としても、特別な席での器としても重宝される逸品です。

保存状態も良好で、10客揃いです。



16.

日の出鶴椀 10客組

岡田 表寛

共箱

径13.5cm 高さ9.5cm

蓋には、日の出に羽ばたく鶴が繊細な蒔絵で描かれ、吉祥を象徴する意匠が格調高く表現されています。10客とも少しずつ違う動きの鶴が描かれています。内側には波文様が金であしらわれ、細部に至るまで丁寧な手仕事を感じられる一品です。

岡田表寛は、京都の塗師で、初代嘉左衛門は京漆師・表派の祖である初代木村表斎に師事しました。京都奨美会依頼の書棚、文台、硯箱の下地を担当しました。





10客とも少しずつ
違う動きの鶴が蒔
絵されています。



17.

青瓷盃

清水 卯一

共箱

昭和

人間国宝

径6cm 高さ4.2cm

本作は、人間国宝、清水卯一による美しい青瓷釉がか
けられた盃です。

深く吸い込まれるような青磁の色合いは、見る者の心
を穏やかにします。器表に現れる細やかな貫入は、焼
成の過程で生じる自然な現象であり、まるで氷のひび
割れのように繊細で、作品に一層の奥行きと表情を与
えています。手に取ると、そのなめらかな質感と程よ
い重みが心地良いです。



18.

額 「濱田庄司 目と手」

棟方 志功

額：縦49cm 横64cm

日本が誇る世界的板画家である棟方志功による肉筆の書画です。画面には力強い筆致で「濱田庄司 目と手」という文字が書かれており、その下には丸みのある壺と、直線的な角皿が描かれています。左下には棟方志功の落款である「棟」の印が押されています。

特筆すべきは、濱田庄司の展覧会図録に『目と手』という書籍があり、その中にも棟方志功による似た作品が掲載されています。濱田庄司は作陶活動と並行して、世界各地の工芸品と生活雑器の蒐集もしていました。そうした中で、濱田所持の「目」で選び抜かれた蒐集品と、濱田庄司の「手」で作られた作品がこの展覧会図録には掲載されています。民藝運動の中心的なメンバーであり、棟方志功とも親交の深かった陶芸家・濱田庄司の美意識、特にその「目」と「手」によって生み出される造形への敬意を表しているのではないのでしょうか。両者の芸術的交流の深さを物語っています。



19.

額 沖縄風物

芹澤 銈介

共シール

昭和

人間国宝

額：縦52cm 横64.5cm

型染の人間国宝、芹澤銈介による、絵本『沖縄風物』からの一場面を額装した作品です。数ある芹澤作品の中でもひととき鮮やかで、今なお高い人気を誇る『沖縄風物』は、芹澤が戦前に目にした夢のような沖縄の風景が凝縮された一冊です。

この絵本は全部で9つの場面で構成されており、本作は「四、店名産泡盛漆器指物の店々 枕筥・茶盆、重櫃・燭台」にあたります。本作では、泡盛や漆器、指物といった沖縄の名産品を扱う店々が描かれ、上部には枕筥、茶盆、重櫃、燭台といった品々が配されています。芹澤銈介ならではの色彩感覚と構成力で、活気あふれる沖縄の情景が鮮やかに表現されています。



20.

金描曲る道画賛幅

富本 憲吉

共箱
昭和
人間国宝
幅62cm 長さ125cm

曲る道は、奈良県生駒郡安堵町に実在する場所です。
富本憲吉の生家があった場所でもあり、富本が愛した風景です。
紺地に金で、地蔵尊をまつる小堂と麦畑、その右には梨の樹が描かれています。後ろに描かれている山は、談山神社のある多武峯とあります。

富本は、曲る道の風景図は、お皿に描く図柄として用いることが多かったようです。

なお、箱書きは「富本憲吉識」と書かれていることから、後々、所有者が富本にこの作品を持って行き、箱書きしてもらったのではないのでしょうか。



21.

菊花籠図幅

狩野 周信

絹本
江戸時代
幅50cm 長さ184cm
全体にシミ有り

画面中央には、重厚な籠に活けられた色とりどりの菊花が、精緻な筆致と豊かな色彩で描かれています。秋を象徴する草花が静かに咲き誇っています。

狩野周信は、江戸幕府御用絵師・狩野尚信の嫡男であり、木挽町狩野家を継承した名手。本作品においても、線の確かさと色彩の節度、構図の安定感に、狩野派の伝統が表れています。

狩野周信は、江戸幕府に仕えた御用絵師で、狩野派（江戸狩野）の中で最も格式の高い奥絵師4家の1つ・木挽町狩野家の3代目です。



22.

屏風「野分」 四曲一隻

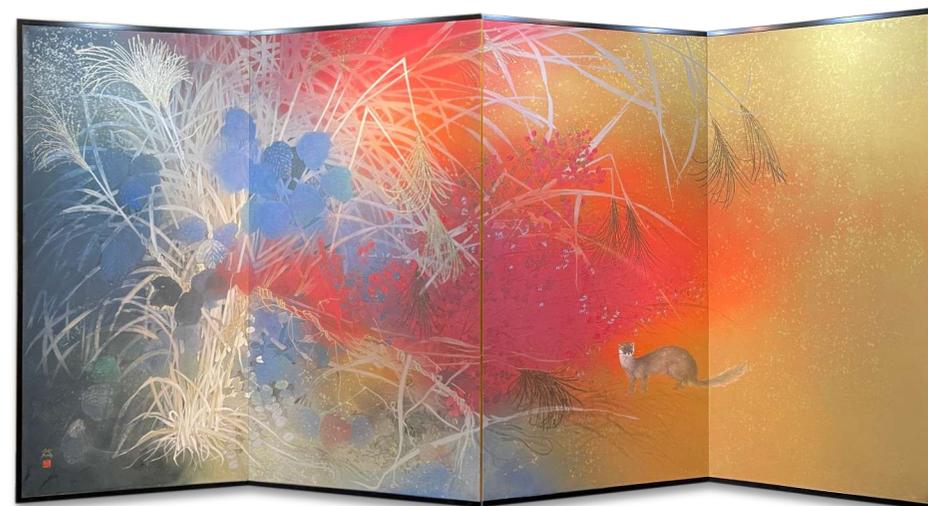
松村 公嗣

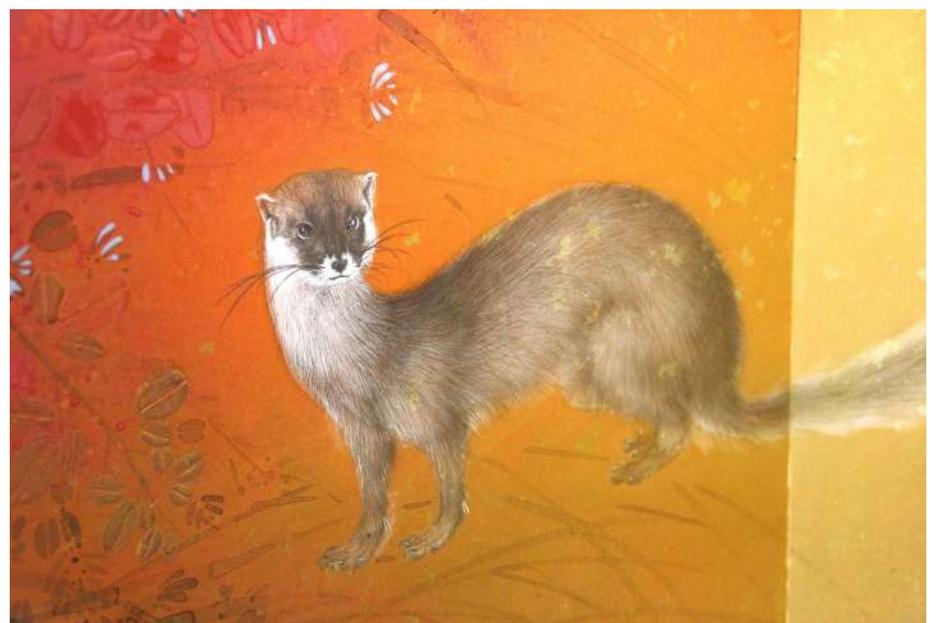
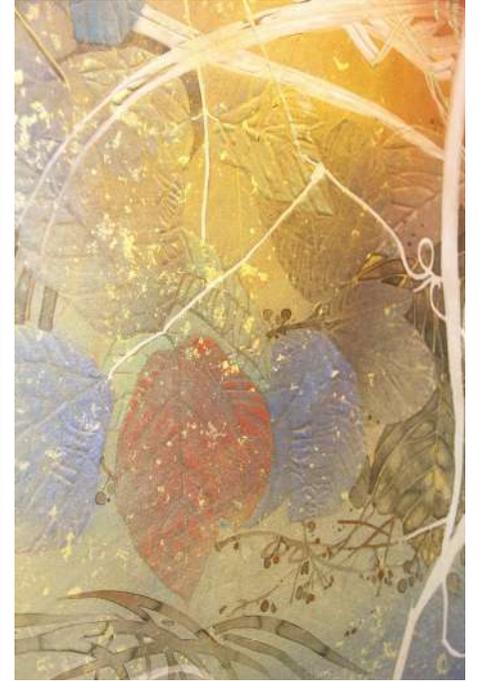
共箱、共シール

昭和 -

一曲の幅：約84.5cm 高さ 約171cm

鮮やかな色彩と繊細な筆致で知られる日本画家・松村公嗣による、華麗な屏風作品「野分」です。秋の風に揺れる草花を、深い青、燃えるような赤、そして柔らかな金箔の背景で見事に表現しています。画面右には愛らしい小動物が描かれ、自然の中に息づく命の気配を静かに伝えます。四曲一隻の構成で、空間に華やかさと格調をもたらす一品です。伝統的な屏風の技法に、現代的な感性が融合した本作は、和洋問わず多様な空間に調和します。





作家略歴（五十音順）

永楽 正全（15代 永楽善五郎）

1880（明治13）年 - 1932（昭和7）年
14代妙全の甥。妙全の没後、1932（昭和7）年までの約5年間、15代として活躍しました。妙全生存中はその代作に当たり、大正初年には信楽へ赴きました。建仁寺4世竹田黙雷老師より「正全」の号を受けました。

岡田 表寛

生没年不詳 京都生・塗師 初代嘉左衛門は京漆師・表派の祖である初代木村表斎に師事。京都奨美会依頼の書棚、文台、硯箱の下地を担当した。岡田表寛家は京都の塗師職家。表寛を襲名。

加藤 卓男

1917（大正6）年 - 2005（平成17）年
岐阜県多治見市生まれ。父 5代加藤幸兵衛に師事。古代ペルシア陶器の斬新な色彩や独創的な造形、釉調に魅力を感じ、西アジアでの長年の発掘研究を経て、滅び去った幻の名陶ラスター彩の復元をはじめ、青釉、三彩、ペルシア色絵など、高い芸術性を持つ異民族の文化と日本文化との融合に成功。平成7年に人間国宝に認定。

狩野 周信（かのう ちかのぶ）

1660（万治3）年 - 1728（享保13）年
日本の江戸時代前期から中期にかけて活躍した絵師。江戸幕府に仕えた御用絵師で、狩野派（江戸狩野）の中で最も格式の高い奥絵師4家の1つ・木挽町狩野家の3代目。幼名は生三郎、初名は右近で、如川、泰寓斎と号した。父は狩野常信、母は狩野安信の娘。弟に岑

信、甫信、子に古信。延宝6年（1678）19歳で4代将軍家綱に御目見。『徳川実紀』「有徳院殿御実紀附録」には、「養朴うせぬる後は、其子如川周信を召して、常にとひはからわせ玉ひしが」とあり、常信没後、有徳院・徳川吉宗の絵画指導をしていた。

河井寛次郎

1890（明治23）年 - 1966（昭和41）年
島根県生まれ。東京高等工業学校窯業科卒後、京都市陶磁器試験場に入所。京都市五条坂に窯を築き作陶を行う。東洋古陶磁の技法による作品を制作していたが、民藝運動に関わり、実用を意識した作品に取り組むようになる。文化勲章、人間国宝、芸術院会員への推薦を辞退。

島岡 達三

1919（大正8）年 - 2007（平成19）年
組紐屋の息子として東京に生まれる。浜田庄司に学び、1953年、益子に窯を築く。組紐を転がし、そこに化粧土をかける縄文象嵌という独自の技法を生み出す。世界各地で個展を開き賞賛を受ける。1996年、重要無形文化財(人間国宝)認定。

清水 卯一

1926（昭和元）年 - 2004（平成16）年
京都生まれ。昭和15年、石黒宗麿に師事。国立京都陶磁試験場伝習生を経て、京都市立工業研究所窯業部助手。その後は自宅陶房を中心に陶芸活動に専念。昭和33年、ブリュッセル万国博覧会グランプリを受賞。昭和60年、人間国宝に認定。

田村 耕一

1918（大正7）年 - 1987（昭和62）年
富本憲吉に師事。昭和28年、郷里の栃木県佐野に築窯。日本伝統工芸展などで活躍した。鉄絵の技法を基本にして独自の作風をきずき、イスタンブール国際陶芸展グランプリなど、国内外での受賞多数。51年、母校 東京芸大の教授。61年、鉄絵で人間国宝。

富本 憲吉

1886(明治19)年 - 1963(昭和38)年
奈良県生まれ。東美校図案科卒業後、留学先の英国で工芸品に感銘を受け、帰国後、陶芸家バーナード・リーチとの出会いを機に作陶を始める。奈良に窯を築き、その後、東京に住まいを移し窯を築く。晩年は京都に移住。人まねではない独自の模様や造形に終世こだわり続けた。

濱田 庄司

1894（明治27）年 - 1978（昭和53）年
神奈川県生まれ。東京高等工業学校（現東京工業大学）窯業科に入学、板谷波山に師事。同校を卒業後は、河井寛次郎と共に京都市立陶芸試験場にて主に釉薬の研究を行う。この頃、柳宗悦、富本憲吉、バーナード・リーチの知遇を得る。大正9年、イギリスに帰国するリーチに同行、共同してセント・アイヴスに築窯。大正13年、帰国し、沖縄 壺屋窯などで学び、その後、栃木県益子町で作陶を開始。昭和30年、人間国宝に認定。

船木 研兒

1927（昭和2）年 - 2015（平成27年）
江戸時代より170年の歴史を持つ布志名焼窯元 船木家に生まれる。濱田庄司に

師事し、その後、日本民芸館賞、現代日本陶芸展やサロン・ド・ブランタン奨学賞を受賞する。昭和28年には、琉球政府の招聘により渡琉、作陶している。リーチの窯場にて研修。これを機に、スリップウェアと呼ばれる英国で17-18世紀頃に盛んに作られた化粧泥で模様をほどこした品物に魅せられ、この技法を本格的に取り入れる。日本に戻り、各展覧会に出品し受賞。

松村 公嗣

1948年 奈良県生まれ

日本画家・松村公嗣は、現代日本画壇を代表する作家の一人。愛知県立芸術大学在学中に片岡球子に師事、日本画の基礎を習得。大学院に進学し、院展に初入選。その後も数々の受賞を重ね、現在は日本美術院の理事として活躍。また、母校・愛知県立芸術大学においては約50年にわたり後進の育成に尽力し、学長も務めた。さらに、雑誌『文藝春秋』の表紙絵を手がけていることでも広く知られている。

棟方 志功

1903(明治36)年 - 1975(昭和50)年
20世紀の美術を代表する世界的巨匠の一人。日本の板画家。青森県出身。昭和17年以降、彼は版画を「板画」と称し、木版の特徴を生かした作品を一貫して作り続けた。